
曖昧なワタシ

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曖昧なワタシ

【Nコード】

N4025B

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

ワタシは雪村大都、それは確かな記憶に基づいたアイデンティティーであるはずだった。しかし、そこには恐るべき罠があったのだ。

妙な胸騒ぎのした夜に、ある犬のような動物の臭いのする生き物が、私の元を訪れた。そいつは「大事な物を盗んだ」と言つて、「それを取り返しに来た」とも言つた。

私は覚えが無いので正直に、

「そんなものは知らないから、さつさと帰ってくれ」と言つた。

すると、その犬のような臭いのする生き物は

「ふふん」

と鼻息を荒くすると、ますます犬のような臭いをさせて言つた。

「お前のように薄汚い泥棒野郎は初めてだ」

私は困り果てて、

「もうすこし順序だてて話をしてもらわなければ、何がなんだかさっぱり分らない」

と返した。すると、その犬のような動物臭のする生き物は言つた。

「話しても言いが、話を聞いたら、ちゃんと返してくれるんだろうなあ」

私はそれに対して、「返すべきものが、あるならば返す」と答えた。

「あれは、三年前にお前が研究所にいた時の話だ」

そう切り出した動物臭の生き物に私は鋭く言つた。

「研究所だつて？ 私は一度も研究所に入つた事なんて無いし、三年前は日本にいなかったはずだ」

「それこそが、そもそもの間違いだつて事に、なんで気付かないのかね」

私は何がなんだか分からなくなっていた。

「あんたは三年前、自分がパリに居たと思つている。しかし本当にそうだろうか？」

「何を根拠にそんなデタラメを……なんなら証拠を見せよう」

私は確かにパリで、友人と一緒に羽を伸ばしていたはずだった。私は、棚にあったアルバムに無造作に挟まれた封筒を取り出した。その妙な動物臭の生き物は自信たっぷりに私を見ていた。写真には、凱旋門やエッフェル塔をバックに撮った写真が何枚もあった。

「どうだ、これでも嘘をつき続けるのか」

「はっは、お前さん、よく見てみるよ。ここに写っているのは、どれもお前じゃなくて、お前の友人だ。一枚だってお前さんは写っていないじゃないか」

言われてみると確かに、この写真には私の姿は写ってはいなかった。なんで、こんな不思議な事に気が付かなかったのだろうか。

「お前さんが、パリに行ったという証拠はどこにもない」

「そんな馬鹿な、私は確かに……そうだ、電話で友人に確認させよう」

「どうかな」

不敵な笑みを浮かべている犬のような臭いの生き物を訝しがりながらも、私はケータイ電話のボタンを押した。

「もしもし、私だが、斎藤君かね？」

「はい、そうです。どなたですか？」

「ああ、雪村だが」

「雪村さん……ですか？」

「そうだ、こないだのパリで見た戯曲は実に良かったなあ」

「は、はい、確かに雪村さんとパリで戯曲を見ましたが……貴方いったい誰です？」

「え？」

私は、ますます訳が分からなかった。

「貴方は確かに雪村さんの様な喋り方をしていますが、女性ですよ？」

「何を馬鹿な事を言って……」

女性だなんて、そんな変なことを言われるとは思わなかった。

私はケータイを切って、奇妙な犬のような臭いのする生き物に向き

直った。私は、この状況を説明できるのは、何もかも知っていると
言いたげなこの生き物しかいないと思うようになっていた。

「これで分かったでしょう。三年前、お前はパリにはいなかった」

「……」

「そしてお前は男性でもなければ、雪村でもない」

「そんな事……」

「そしてお前は、人間ですらない」

この不気味な犬のように動物的な生き物の言う事は滅茶苦茶だった。
「お前は三年前、ある研究所で造られた精巧なアンドロイドだった
のだ」

「そんなSFみたいなことがあるか」

「そして、お前を造ったのは他でもない私、雪村大都だ」

「お前が雪村大都？雪村大都は私だ」

「嫌、違う。お前は人間ではない。その証拠に、お前からは動物的
な臭いがしないだろう」

「動物的な臭いだと？この私からそんなモノがする訳ないだろう」

「それこそが、お前がアンドロイドだという証拠だ。私は実験の際
に、本当はメイド用のOSを入れるはずが、誤ってお前の記憶に、
私の日記を入れてしまったんだ。」

メイド？この私が……。

「そんなのはデタラメだ、私が雪村大都だ。私は三ヶ月前までに食
べた夕食のメニューを全て暗唱できるぞ。ラーメンだろ、焼き魚、
ボルシチ、ラー……」

「そんな事、本物の雪村大都にできるわけないだろう」

「できないのか？」

「普通の人間なら、おとといの晩飯が限界だ」

嫌だ、メイドなんて嫌すぎる。この男を処理すれば、私が本物の雪
村大都になれるかもしれない。

「さらに、ロボット三原則によって、お前は人間に危害を加える事
はできない」

「仮に、私がアンドロイドだとしても、お前にOSを書き換えさせなければ良い」

「だが、お前は返すべきものがあるなら返すという約束をした。私の日記を返すという事は、全て最初からOSのインストールをやり直す事に他ならない」

「く、なんて卑劣な」

「狡猾いと言ってもらおうか」

「分かった、この日記はお前に返そう。だが最後に、これだけは最後に約束してくれ」

「なんだ」

「猫耳だけは止めてくれと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4025b/>

曖昧なワタシ

2010年10月12日01時06分発行